

時代とともにふりかえる

『つな環』24年のあゆみ

2002年の創刊からこれまで、24年間発行された『つな環』47号分(創刊準備号、創環号～第46号)を並べて見たところ、表紙のデザインを基準に大きく2度のリニューアルが行われたことが確認できました。これまでのバックナンバーを読み進めると、これらの2度にわたる

リニューアルは、単なるデザインの更新にとどまらず、『つな環』が取り上げるテーマの捉え方、更には環境パートナーシップの姿にも緩やかな変化が見られました。ここでは、それぞれの時期の『つな環』の特徴を簡単にご紹介します。

第1期

創刊準備号(2002年7月)～第15号(2010年3月)



『つな環』創環号の表紙

「ツナ缶」になぞらえて名付けられた通り、「ツナ缶」に見立てたロゴマークが特徴的です。この時はまだ「環境パートナーシップ」そのものが先進的な概念であったことから、そもそも「環境パートナーシップ」とは何か、またそのための手段や優良事例は何か、ということを紹介することに焦点が当てられました。

特に、各号の特集テーマについて関連するセクターの関係者が取組や思いを寄せた「寄稿」形式の記事が多いことも特徴です。各号の特集テーマに関わる事例や考えについてNPO/NGOをはじめ企業や自治体など多様なセクターの方々から寄稿していただくことで、特集テーマについて多層的な議論ができるように目指していました。

また、GEOC/EPOの機関誌として、GEOC/EPOの取組について直接触れる特集や記事が多くみられることも特徴です。

第2期

第16号(2010年9月)～第27号(2016年3月)



『つな環』第27号の表紙

この期間、世の中では「生物多様性条約COP10(2010年)」、「東日本大震災(2011年)」、「リオ+20サミット(2012年)」、「改正環境教育等促進法の施行(2012年)」、「SDGsの採択(2015年)」、「気候変動枠組条約パリ協定の採択(2015年)」など、今の社会に対して大きな影響を与えている出来事が複数ありました。そのため、各号では時機に見合った重要テーマが取り上げられることとなり、テーマの専門性と多様性が同時に高まった時期と言えます。

ちなみに、第1期と第2期の間である2010年4月には地球環境パートナーシッププラザの英語名称が「GEIC: Global Environment Information Centre」から「GEOC: Global Environment Outreach Centre」に変更となりました。このように「様々な環境に関する情報を受発信する」ことから「しかるべき主体にしっかりと届け、行動につなげる」ことに少しずつついでしていた時期でもありました。

第3期

第28号(2016年11月)～現在



『つな環』第45号の表紙

第28号の制作時に明確に「リニューアル」を宣言し、デザインとコンテンツの両面で、現在に続くフォーマットが整いました。まずデザイン面では、シンプルで読みやすく、全体として統一された雰囲気を目指しました。

そして、コンテンツの方では、現在のような目次構成が確立しました。まず鼎談(対談)という形で、第一線でご活躍されている、複数のセクターの方から特集テーマの全体像や俯瞰的な動向を伺いつつ、特集テーマに関連する地域レベルでの実践について詳しく紹介するコーナーを設けました。それ以外のコーナーでも、既存のコーナーを継承しながら時代の変化を反映しました。

またこれまでと比較すると、GEOC/EPOの取組が直接紹介される場面はほとんどなくなりましたが、国内事例の紹介記事など各記事では「つな環編集部」であるGEOCのスタッフが自ら取材をし、そこで得られた情報や知見を担当者の言葉としてまとめて伝えることを意識しています。